

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2671700116		
法人名	社会福祉法人 七野会		
事業所名	グループホームみやま		
所在地	京都府南丹市美山町高野素崎14-2		
自己評価作成日	平成22年11月15日	評価結果市町村受理日	平成23年3月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://kohyo_kvoshakyo.or.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2671700116&amp;SCD=320">http://kohyo_kvoshakyo.or.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2671700116&amp;SCD=320</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 市民生活総合サポートセンター
所在地	〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目4番17号 千代田第1ビル
訪問調査日	平成22年12月16日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設後5年が経過し、高齢化・重度化されていく中で、一人ひとりの生活のペースを考え、援助に当たっている。大きな事はできていないが、日々の小さなケアの積み重ねで、重度の方の生活も支え昨年ターミナルと言われた方が驚くほど回復されている。入居者のADLや認知度に合わせて、行事や職員の業務も変化させながら、苦戦しながら日々奮闘している。山間地であり、近くに商店なども少なく不便な面もあるが、自然は大変豊かであり、静かで過しやすい環境でもある。敷地や建物も都市部と比べると、ゆとりがあり広々としている。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人理念の基に、事業所として利用者の暮らしの尊重や地域から信頼され期待される事業所への研鑽など4つの運営方針を定め、職員は適切なケアの提供に向け取り組んでいます。重度化が進む中で、食事をしっかり摂る事やトイレで排泄を行うなどの支援を重ね状態が回復されるなど、小さな積み重ねが大きな力となる事を管理者をはじめ全職員が実感されています。職員は互いを思いやりながら様々な課題に取り組むことで、信頼関係や責任感の向上につながり利用者の支援に活かされています。地域の関わりを大切にしたいホームのあり方は、と地域住民のホームへの理解や協力が繋がっています。更に地域の方が介護の事など気軽に相談に訪れることができる老人介護の拠点となれるよう総合的に取り組んでいます。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設から5年が経過し、地域のみなさんに事業所の存在及び認知症への理解を深めていただいている。増えている認知症の高齢者や家族の相談窓口として、地域の中でさらに機能を広げ、信頼される事業所を目指したい。	法人理念の基に、ホームでは地域の伝統や利用者の「自分らしくらし」に向けた運営方針を定めている。方針に沿ったケアの提供に努め、定期的に日々のケアの実践報告を行い、方針に沿ったケアについて発表する場を持ち、振り返る機会を持っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所全体の行事、夕涼み会には、地域の方々に多く参加していただき、共に食事を楽しんだり、盆踊りで盛り上がった。GH独自では、春と秋の家族懇親会に地元の関係者や運営推進委員さん介護相談員さんに参加をしていただいている。	職員は地域会議や学習会へ参加し、みやまふるさと祭りにはこぶしの里として出店し、利用者と共に参加している。小学校からは、子供たちによる詩の朗読会や育てた菊の花が届けられたり、地域のボランティアによるホームの掃除やおやつ作りを共にを行うなど様々な地域交流の機会を持っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の地域や団体・ボランティアの方々が、日々訪れてくださるが、見学・事業の説明に加え、認知症について話し合う機会を持つようになっている。率直な悩みを聞かせていただいたりする、貴重な機会でもある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度の特徴として、運営推進会議の充実が上げられると思う。異なる分野から多くの委員さんに出てもらっているが、毎回活発な会議ができています。	家族代表や行政、消防、地元商店主など多くの関係者の参加を得て開催している。ホームの現状について報告を行い、防災や個別外出など、その時々議題について意見交換が行われている。様々な地域情報を得て支援に活かしたり、有意義な会議の場となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議のメンバーに行政からまた地域包括から参加を得ているので、お互いの情報交換や協力関係は図れている	美山支所が近い為、訪問したり電話などで日ごろから介護の事、福祉の事等わからない事は何でも相談をしている。市の職員には運営推進会議へ参加を得るなど積極的に関って頂き協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員共通の認識は押さえながら、特に玄関の施錠等については状況に即した対応をしている。山間地であること、例えば今年は熊の出没が頻繁にあることなどがあげられる。	出入り口が多く夜間でも出かける方がおり、なぜ出て行かれるのかその原因や背景について職員間で話し合い利用者の心のサインを見逃すことがないように寄り添うケアに努めている。身体拘束や言葉による抑制について研修を行い職員間で理解を深めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	スピーチロックの学習会を開催し、虐待の内でもつい見過ごしてしまう「言葉」の虐待について学びあう機会を持つことができた。		

グループホームみやま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	毎年、市の人権擁護委員さんが訪問してくださって、入居者の方に直接お話をされたり、職員も一緒に人権擁護に関する制度等を学ぶ機会がある。また、内部学習会として、理事長の講演を聴く機会を1年に1回持っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	この1年で新たな契約・解約等はなかったが、入院時の費用や今後の生活について、相談があり情報を集め、家族に提案報告するなどの対応をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議のメンバーに家族が3名入って下さっているため、行事や日常的な事にも意見を聞かせてもらっている。日帰り旅行の内容や敬老の日の食事・お誕生日のお祝いなど利用者の希望を聞いている。	出来るだけ多くの意見を聞くようにしており、信頼関係を育むなかで言いたいことが言える関係を築いている。家族懇親会を開催し、家族間の交流の際に意見を聞いている。利用者と家族とで思いが異なる場合には、調整を行いながら利用者本位となるよう心掛けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議やケース会議には、可能な限り施設長も出席している。また月1回の各事業の役責者との運営会議を行っている。必要時には、各職員とのヒアリングを行なっている。	全職員が職員会議やケース会議に参加できるように改善を図り、職員の意見を聞く機会を持っている。会議では活発な意見が出され会議に参加することで新人職員の責任感の向上やスキルアップへと繋がっている。意見や要望は職員間で共有し運営に活かしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	懸案であった夜勤の時間短縮を図り、夕食の調理業務を軽減するなど、改善できたことは評価したい。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人全体として、管理職をはじめ、それぞれの経験に応じた研修が体系的に完備しているので、積極的に参加を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	山間地の事業所として、数は限られており、相互に助け合いながら、それぞれ機能の拡大をはかり、情報交換や行事の参加など、だんだん緊密になってきている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	この1年で新規の入居はなかったが、これまでも見学やお試しの宿泊等を行い、少しでも安心して入居できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の相談には丁寧に対応しグループホームの機能を充分理解していただけるよう努めている。求めていることに応えるための社会資源の紹介も行なっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	現状の正確な把握・適切な援助を心がけている。当施設で援助が困難な場合は情報提供に努め場合によっては紹介や照会も行なっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居の方々には、日々教えていただくことが多くある。相手とじっくり向き合うことで、引き出せる会話も多いことに気づく。聴く姿勢と言葉遣いには充分に気をつけたいところである。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の心身の不安や負担を軽減し介護を共有する仲間として時には情報交換を密にし、時には協力しながら関係作りに努めている。年2回の懇親会では一緒に調理や業をし、一緒に食事をして交流を深めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の行事があれば、可能な限り出かけていくようにしている。(お祭りや福祉のつどい・選挙など) 買い物に出ると地域の昔馴染みの方から声をかけて下さることも楽しみであり繋がりをもちことが出来ている。	行きつけの理美容院への送迎や、自分の家を見に行ったり、墓参り、銀行、郵便局など希望に沿って日々職員と共に外出している。選挙時にはそれぞれの出身地域へ出向いて投票を行い、懐かしい方に声をかけて貰うなど馴染みの関係を大切に支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	グループホームは、一つの大きな家・家族と言われるが、一人ひとりそれぞれの人生を送ってきておられるので生活スタイルや考えも違うので関係作りやその維持に常に配慮しているが重度化や認知症の進行もあり苦慮している。		

グループホームみやま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	特に相談などはないが、年賀状や暑中見舞いなど交流をしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	重度化はあるが、可能な限り本人に小さなことでも思いを聞いて介助するようにしている。(トイレ入浴・食事・散歩・外出など)家族からの情報も関わりや外出先の参考になっている。	日々の生活や、利用者のふとした呟きの中から思いを汲み取れるよう努めている。思いを伝えられない方には職員が傍にゆったり寄り添う事で、しっかりと伝えることができるようになった事例もあり、汲み取った利用者の声を大事にしながらケアプランに繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	職員の入れ替わりが多かったこの一年年度当初には以前家族に書いて頂いた広報の記事を再度職員会議で読み返したり、家族や本人にも改めて聞くなどして、日々の援助に生かしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケース記録や伝達ノートへの記録を充分に行なう事、そしてそれを充分に読み把握する事と職員間の情報交換を密にしている。ケース記録の他にも食事や排泄のチェック表を活用し状態の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	今年度より個別のケースについて、より深める事ができるように職員会議と分けてケース会議を行なっている。遠方の家族が多いこともあり、家族や本人を含めたサービス担当者会議は、今年度も行なえていない。	毎月担当職員がプランに沿って詳細な意見や次のステップに向けての課題などを記入している。それらのケース記録を基に評価を行い次のプランに反映している。毎月カンファレンスを開催し、本人や家族の意向を基に検討し必要時専門職に意見を貰いながら職員間で話し合い3か月に1度見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	常にケアプランを意識して援助ができるようにケース記録の上段に援助内容が明記してあるため、記録にも反映されている。伝達ノートも活用し、日々のケアやケアプランの見直し時に有効に活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	デイサービスが廊下で隣につながっているため面会や行事などでの交流が出来る。家族が遠方ということもあり、通院や美容院への送迎、入院時の衣類管理など員で対応することが多い。		

グループホームみやま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎月訪問して下さって、草引きや掃除などをしていただくボランティアがある。介護相談員さんの訪問も定着して、入居者のみなさんも近い友人として来てくださる日を楽しみにされている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	地域医療に熱意のある医療機関にお世話になり、日常的に細やかな対応をしていただいている。往診にも来て頂き、入居者一人ひとりをよく知っていて下さって、とても頼りになる存在です。良好な関係に感謝。	希望によりかかりつけ医の受診を支援している。月2回協力医の往診があり、日常的な医療に関する相談は併設のデイサービスや協力医の看護師が対応している。山間部医療に取り組んでいる協力医は緊急時24時間対応でホームの医療に関わり安心な医療体制となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携加算を取っており、デイの看護師や診療所のDr・NSとも情報交換を密にしている。往診もして下さる診療所のDrは大変熱心に関わって下さっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	日頃から、かかりつけの診療所とは、情報交換を密にしている。また、大変熱心で親切であり頼もしい存在である。入居者の家族への理解度も高いDrである。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	開設より5年が経過し、重度化・高齢化が顕著になってきている。昨年、ターミナルと言われた方は、奇跡的に回復されているが、他の方で少しずつ状態の低下されてきている方がおられる。早い段階からの準備・対応というのは本当に求められているし必要が迫られている。	利用者の重度化が進む中、家族の希望があれば意向に沿いたいと考えている。家族や医師と終末期に向けた方針について話し合いを重ね、職員の不安については職員会議の中で話し合っている。ホームの近くに住むデイサービスの看護師からの協力を得たり、重度化に備えた支援体制作りに取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルはあるが、それを活用した訓練や学習会に取り組むことができていない現状がある。法人全体で行なわれる救急救命講座に参加するので、少しでも他の職員にも伝えられるようにしたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の常会等の際に、GHの状況話し、緊急時の協力をお願いしている。地元消防団の月1回の訪問・点検もあり、防災に努めている。避難訓練は夜間・昼間とも実施し、あらゆる場面を想定して動けるよう、努力している。	防災管理者研修に参加し、災害想定や消防署立会いによる昼間想定訓練とホーム独自で年3～4回夜間を想定して行っている。地域消防団が毎月火の元の点検に訪れたり、運営推進会議でも災害時の協力を依頼している。日頃から地域との関わりや信頼関係を築き、災害時に協力が得られるよう取り組んでいる。	

グループホームみやま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	今年度、入職の職員が多く、言葉使いなど、目上のお年寄りに対するかかわりや対応について、十分に伝えると共に、先輩職員も自分の日々のケアをふりかえり、再確認している。	利用者を尊重した言葉使い等について研修を行い、心安さの中でぞんざいな声かけにならないようお互いに注意し合っている。トイレ時の声掛けなどでは利用者の傍へ行き小声で行うよう配慮している。時には利用者からの意見で教えられる事も多くあり、職員には自身の言動を振り返る良い機会となっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ADLの低下、加齢、重度化により、難しいこともあるが、小さなことでも、本人の希望や意見を確認するよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	重度化・高齢化に伴い、ADLの援助に関わる時間が多くなり、職員の段取りが優先されてしまう場面も起こる現状がある。職員の技術や意識の持ち方で散歩や買い物・レクなどできていることもあるので今後も努力していきたい。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居前からの行きつけの美容院の利用を継続されている方もおられる。時々、衣類を買いに出かけることもある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	年々できる方が少なくなっているが、スタッフの関わりかた次第で、できることもあるので、工夫している。畑で取れた野菜の掃除や盛り付けも常にしてもらっている。	下ごしらえや盛り付け、後片付けなど利用者の負担にならない範囲で手伝って貰っている。庭の畑と一緒に収穫したり頂き物の野菜が日々の食卓に上っている。春と秋の外出時の外食は利用者の楽しみとなっている。職員は同じテーブルで同じ食事を摂り団欒の時間となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量を把握して、盛り付けすぎないようにしたり、水分については、必要な人にはチェック表を活用している、好みのジュースや楽しみとしてお酒を飲まれる方もおられる。薬や病気のことでノンアルコールのビールにしている方もある。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝晩はできている方が多いが、毎食後は充分ではない。誤嚥性肺炎を起こしやすい方もおられるので、今後の取組み、工夫が課題である。		



グループホームみやま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄状況をつかみ、オムツの形態を工夫したり、トイレで排泄したいという思いを大切に、誘導(必要時2人介助)をおこなっている。昨年ターミナルといわれた方も、驚くほど回復され、日中は毎日トイレ誘導をしている。	トイレで排泄を行いたいという利用者の思いを大切に、希望に沿って支援している。立位が難しい方は2人介助で対応したり、トイレに座ると排便がある方は定期的に座ってもらうなど、一人ひとりに応じた支援を心がけ自立に向けて取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	普段の食生活は、野菜も多くまた、おやつにも、バナナや果物もとっていただくようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	歩行や認知状況に合わせて、一人ひとりが、安全に、また、理解納得し、安心して入れるよう、時間、対応に工夫をしている。デイのリフト浴が活用しきれていない。	入浴時間は概ね午後から夕食後となっているが、温まると寝やすい方や毎日入浴したい方には希望に沿った入浴支援を行っている。拒否傾向のある方は時間をずらして声掛けしたり、翌日に変更するなど入って貰えるよう工夫しながら柔軟に対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	加齢にしたがって、睡眠のサイクル、リズムが変わってきている。48時間目覚めていたり、24時間眠り続けていたりといったことがある。GHの日程に無理に合わせず、様子を見ながら朝の起床や離床時間を調整している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ほとんど全員の方が薬を服用されている。何のための薬で、どのような効果と副作用があるのか、常に勉強し、ケアに生かしています。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	年々できることや楽しめることのレベルに変化が見られるので、好きなこと、やりたいことが少しでも継続できるように、一人ひとりの状況をつかんで働きかけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	一泊旅行が難しくなってきたため、今年度は、日帰り旅行を春と秋2回、家族の協力も得ながら行った。日々の業務に追われて難しいが、時間を見つけて、近所の買い物や周辺の散歩への声かけ、援助を行なっている。	散歩や買い物、ホーム新聞を商店や郵便局、学校などへ一緒に配ったり、様子を見て喫茶店へ誘って気分転換をするなど支援をしている。家族の協力を得て一泊旅行や個々の方の希望を聞いた個別の外出支援も行っている。	



グループホームみやま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人ひとりの希望に合わせて財布を持ち、支払いもしてもらっている。近所に買い物をするところが少ないので、日帰り旅行や外食の行事の際に買い物もできるように計画に組み入れている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の事情などがあり。常に自由とはいかないが、必要、状況に合わせて、支援をしている。入居者は全体的に、手紙を書いたり、TELをかけることが難しくなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	1年前に比べると、入居者のADLもずいぶん低下し。皆さんで分担していた朝の掃除も職員と1~2名の入居者でやる状況。ケアに必要な時間も多くなっており、掃除の仕方にも効率や時間帯を工夫しながら行なっている。	リビングからは四季を感じる豊かな自然が広がり、壁には地域の方の作品や、利用者による季節の生花などが飾られている。庭の畑では大根などが実り利用者と共に収穫を楽しんでいる。リビングの一角や廊下の端にはソファが置かれ利用者が思い思いの場所で寛げるように工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	「集中して食事しやすいように…」食事の席を変更したり、限られた空間を活用して、廊下や窓側などにソファを置き、採光にも気を配り、落ち着けるよう工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ADLが低下したり、認知症の進行があっても、使い慣れた馴染みの家具や物に囲まれて暮らせるよう、例えばつかまっても倒れないよう、家具を固定したり、手すりを設置したりしている。	個室はすべて和室でより自宅に近い環境作りにと考えられている。使い慣れたタンスや鏡台、時計などを持ち込み、タンスの上には孫やペットの写真が置かれ、利用者が安心できる居室作りがなされている。利用者によっては職員が援助して、好みの物を揃え部屋作りを行うこともある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下も広くトイレの数も多く設計されている。開設より5年経過し、必要な所には手すりなども設置している。以前に大工の仕事をしていた職員がおり、一人ひとりの力を把握した上で、環境づくりを考え実施することができている。		